

リアの世界

富原芳彰

一

シェイクスピアの戯曲『リア王』は、齢八十を越えた老王が、彼の王国を三分し、これを三人の娘に分ち与えようと決意したことから、その動きをはじめる。

リア王が右の決意をした動機としては、

'tis our fast intent

To shake all cares and business from our age;

Conferring them on younger strengths, while we

Unburthen'd crawl toward death. — I. i. 39.

（老齢のわが身から一切のわずらわしい用務を捨て去り、これを若く強健な者たちに委ね、自分は身軽になって、静かに余生を送りたいというのが、わが固き念願である。）

リアの世界

という彼の言葉がこれを語っている。

王国を三分して娘たちに与えることを決意したリアは、実際にそれを与える前に、三人の娘たちに対して、いわゆる「愛情テスト」を行う。その理由として、リアは、

That we our largest bounty may extend

Where nature doth with merit challenge. — I. i. 53.

すなわち、「孝心のもっとも篤き者にわが最大の恩恵を与えられるように」という意味のことを言っている。

しかしこれは、その真の理由ではない。なぜならば、国土の分割線はすでにその前に明確に地図の上に引かれており、しかも、「姉たちのより一そう豊饒な三分の一」(*A third more opulent than your sisters. — I. i. 88*)を末娘のコーディリアに与えることもすでに事前にきまっているからである。

すなわち、リアは、三人の娘のうちではコーディリアをもっとも愛していた。リアの側には最初からこういう愛情の不均衡があるが、このことは、ケントやグロスターによって、当然のこととして受け取られている事柄である。

この劇の冒頭に於てケントとグロスターが交わす会話は、王はコーンウォール(次女リーガンの夫)よりもオールバニー(長女ゴネリルの夫)の方を一そうひいきにしていると思っていたが、王国の分配では両者はまったく平等になっているということが話題で、コーディリアの分け前のことについては一言も触れられていない。コーディリアが最良の分け前をもらうことは、いまだら論ずるに当たらないことであるかのごとくである。さらにまたリアが、コーディリアに国土の最良の部分を与える意志を正式に言明した時にも、そのことに対して誰一人反対を唱える者はいない。

すなわち、リアがコーデیلیアに「最大の恩恵」を与えることは、二人の姉娘を含めて、客観的に適當とされているのである。

もう一つここで注意すべきことは、ブラッドリーも指摘していることであるが、リアは三人の娘に国土を三分して、その後は、三人の娘のもとに順次に身を寄せて老後を送ろうと計画しているのではない、ということである。リアは、老後の世話はコーデیلیア一人にたのむつもりでいたのである。

I loved her most, and thought to set my rest

On her kind nursery. — I. i. 125.

(わしはあの子をもっとも愛し、老後をあの子の親切な介抱に托そうと思っていた。)

と彼は言っている。

これだけのことを考えると、リアの行う「愛情テスト」は、国土分譲に伴うまったく一種の儀式にはかならないことが明瞭になる。

そもそも、リア王の話を最初に伝えているのは、十二世紀のジェフリー・オヴ・モンマスがラテン語で書いた『ブリテン帝王紀』(*Geoffrey of Monmouth: Historia Regum Britanniae*)で、それから、アーサー王の事蹟などとともに、ウェイス (*Wace: Geste des Bretons*)、ラヤモン (*Layamon: Brut*) を経て後世に伝えられるとともに、十四世紀に大陸で集められた『ローマ人物語』(*Gesta Romanorum*) にもあらわれ、十五世紀にはその英訳も流布した。十六世紀になると、種々の歴史家や詩人によって取り上げられるようになり、ホリンシェッド (*Holinshead's Chron-*

icles, 1577) は言うまでもなく、その他『奉行の鑑』(*A Mirror for Magistrates*, 1574) に於てジョン・ヒギンズ (John Higgins) が、『アルビオンなる英国』(*Albion's England*, 1586) に於てウィリアム・ワーナー (William Warner) が、『仙女王』(*Faerie Queene*, 1590) に於てスペンサー (Edmund Spenser) が、リアの話を語っており、さらにシェイクスピアの直前には、一五九四年に出版登録がなされ、一六〇二年に出版された『リア王実録年代記』(*The True Chronicle History of King Lear*) という戯曲の作品がある。

シェイクスピアが『リア王』を書いたのは、一六〇六年であるが、その時彼の手許にあったのは、この『実録年代記』とホリンシェットの二書で、その他のものを参照したという積極的な証拠は見出されていない。

ホリンシェットにも『実録年代記』にも、リアが娘たちに対して行う愛情テストが出て来るが、この両者に於ては、シェイクスピアの『リア王』に於けるとは異って、それぞれその愛情テストを行うことを必要とする実質的な理由が用意されている。

ホリンシェットの該当箇所を見ると、

When this Lear therefore was come to great years, and began to waxe unweildie through age, he thought to understand the affections of his daughters towards him, and preferre hir whome he best loved to the succession over the kingdom.

(このリアは、そこで、老齢に達し、齢のために体が不自由になりはじけると、娘たちの彼に対する愛情のほどを知り、彼がもっとも愛する娘を王位の継承者に指名したいと思った。)

とあり、愛情を試験することに対して、王位継承者の決定という重要な理由がつけられている。

『実録年代記』の方でも、理由は同じく実質的かつ実際的である。リアは国家保全のために隣国の王たちと彼の三人の娘とを政略的に結婚させることを考える。上の二人の娘は父親の選んだ夫を受け入れる用意があるが、末娘コーデラ（シェイクスピアのコーディリアに当る）だけは、相手に愛情を感じない以上は誰とも結婚はしなうと言う。しかしリアは何とかしてコーデラにも政略的な結婚をさせなければならぬと思い、一計を案じて、愛情テストをやることになる。三人の娘のうち誰がもっとも父親を愛し、もっとも進んで父親の命令に従う気持があるかをためしたいと言う。そうして実は、コーデラにも、二人の姉と同じように、政略結婚を承諾せざるを得ない立場に立たせようというリアのはかりごとであった。

このように、ホリンシェッドに於ても、『実録年代記』に於ても、リアが行う愛情テストには、それぞれそれを行うことを必要とする十分な実際的理由が設定されている。それにくらべて、シェイクスピアに於ては、さきに述べたように、それを行うべき実際的理由はまったく消えて、それはもっぱら儀式的性格を帯びたものとなっている。

儀式ということを、広く手段の目的化と考えるならば、この儀式的ということが、シェイクスピアのリアの多くを説明するものであるように思われる。リアにとっては、広い意味での儀式的なるものこそ、人間を人間たらしめる本質的条件となっている点を見逃してはならない。リアにとっては、人間は、右の意味での儀式的なるものによって、彼の下位にある存在たる獣類から区別されるのであって、いわば、人間は儀式をまとうことによって人間なのである。後に第二幕第四場（最近の若干の版本によっては第二場）に於て、ゴネリルとリーガンから、随従の武士の数を減らすよ

う求められ、仕える召使はありあまるほどにいる娘の家に滞留する以上、そのような武士は一人も必要ではないではないかと言われてリアが答えるべきの言葉は、リアという人間の性格をもっともあきらかにあらわしているものである。

O, reason not the need : Our basest beggars

Are in the poorest thing superfluous :

Allow not nature more than nature needs,

Man's life's cheap as beast's : Thou art a lady ;

。

If only to go warm were gorgeous,

Why, nature needs not what thou gorgeous wear'st,

Which scarcely keeps thee warm.——II, 267—73.

(ああ、必要を論ずるな。もっとも賤しい乞食でさえ、極貧のうちになおかつ何か余計なものを持っている。自然が必要とする以上のものを人間に許し与えぬとすれば、人の生は獣のそれと同じに安いものになる。おまえは貴婦人だ。もしただ暖くしているだけで華美が足りるといふのなら、なに、自然はいまおまえが着ているような華美なものを必要とはしない、ろくに暖くもないそのようなものを。)

このようなリアにとって、

Sir, I love you more than words can wield the matter ;

Dearer than eye-sight, space, and liberty;

Beyond what can be valued, rich or rare;

No less than life, with grace, health, beauty, honour;

As much as child e'er loved, or father found;

A love that makes breath poor, and speech unable;

Beyond all manner of so much I love you. — I. i. 56.

(父上、わたくしは言葉で言ひあらわすことのできる以上にあなたを愛しております。眼よりも、空間よりも、自由よりも大切に思い、貴い、あるいは稀な、およそ価値ある一切のもの以上に愛し、生命にも、威厳や健康や美や名譽のともなつた生命にもひとしくあなたを愛しております。かつて子がささげ、かつて父が受けたかぎりの愛をもって愛します。息をも乏しからしめ、言葉をも無能にするがごとき愛をもって。いかほどにせよとれだけと言える以上に父上を愛しております。)

というような、まさに巧言令色に飾られたゴネリルやリーガンの言葉こそ、まともな人間の自然な言葉であつた。これに反して、同じく愛情のほどを言えと求められて、コーデイーリアが答える

Nothing, my lord.

(何もいぢません。)

のごときは、リアをして耳を疑わしめるものであつた。それは、彼にとって人間の言葉ではなかつた。人間の口から出れば、化け物の言葉である。“Nothing”とおうむ返しに叫ぶリアの驚きは、単に期待を裏切られた人間の驚きで

はない。それは、まったく予期せざるものにぶつかった人間の絶対的な驚きである。おそらくこの時、リアの眼前で、一瞬、天地は文字どおりひっくり返ったはずである。しかし、それは一瞬にとどまった。「何もないって！」と叫ぶリアに、コーディリアは、もう一度“Nothing”と答える。

これに対して、“Nothing will come of nothing”（何もないところからは何も出て来ない）と言うリアの言葉は、一瞬の目まいを無視して従来の姿勢にもどったリアの言葉であり、「必要を論ずるな」と一喝する儀式主義のリアはすでにここに明瞭に見えている。そして、「何もないところからは何も出て来ない」のではなく、すべてを失った後、そこからこそ、彼にとってのすべてが出て来るということに、この戯曲の含む、そしてこの戯曲にとって本質的な、アイロニーがある。

コーディリアの口から“Nothing”という言葉を聞いた時、リアは、十分にその意味をさとりはしなかったが、その言葉に、彼は、一瞬彼をして目まいを覚えさせる衝撃力を意識した。そして、彼はその一瞬の目まいを故意に無視しようと努めた。しかし、たとえ彼がそのように努めたにしても、その目まいを経験したという実感は、彼の意志に反して、彼の意識に消したい印象を残した。要するに、彼は心の底の落着きを失った。

「何もないところからは何も出て来ない、もう一度言え」と命じられて、コーディリアは言葉の数をふやす。だが彼女は、彼女の“Nothing”を敷衍してもう一度言うのであって、言いなおしを、すなわち、前とはちがったことを言おうとはしない。リアの希望に反して、彼の目まいは、単なる彼の気の迷いではなかったことを、リアは徐々に確認させられなければならない。

How, how, Cordelia! mend your speech a little,

Lest it may mar your fortunes.

(一體どうしたのだ、コーデイーリア。もう少し言葉を繕わんと、身の上が破れるぞ。)

それからさらに、

But goes thy heart with this?

(しかしそれは本心か。)

というリアの言葉は、わが耳を疑いつつも、なお信じがたきを信じなければならなかったリアの狼狽を反映しているものである。彼の狼狽は、彼がもっとも愛し、もっとも信じていた娘に裏切られた狼狽であるよりはむしろ、コーデイーリアのごとき人間がいることを発見した狼狽である。コーデイーリアは、人間は儀式をまとうことによって獣類から区別されて人間である、というリアの人間本質観を、根本から覆えす存在である。いや、覆えすき存在であった。しかし、リアは、コーデイーリアの存在によって彼の人間観を修正しなかった。リアの悲劇はそこから始まる。リアは存在の根源にかけてコーデイーリアと縁を切る。それは、通常の意味での親子の縁を切るだけではない。リアからすれば、それは人間が人間ならざるものに絶縁を宣うのである。

...by the sacred radiance of the sun,

The mysteries of Hecate, and the night;

By all the operation of the orbs

リアの世界

From whom we do exist, and cease to be ;

Here I disclaim all my paternal care,

Propinquity and property of blood,

And as a stranger to my heart and me

Hold thee, from this, for ever. — I. i. 111

(太陽の聖なる輝き、ヘカティ〔魔女王〕の神秘、また夜の闇にかけて、われわれの生死の根源たるあらゆる天体の働らきにかけて、予はここに父たるの一切の心遣いを捨て、血族近親たることを否認し、いまより永遠に、なんじをわが身わが心にとつて縁なき者とする。)

リアにとっては、「かつてはわしの娘であった」コーデイーリアは、「おのれの食慾を厭かすために生みの子をも食らうという残忍野蛮なスキタイ人」と同じものになる。それは、獣または獣以下のものとなることで、リアの考える人間の範疇のはるか外に追放されることである。われわれは理解できないものには恐怖を感じる。コーデイーリアに絶縁を宣した時のリアには、背信と忘恩（と彼が思ったもの）への怒りとともに、不気味なるものへの恐怖があったことを見落してはならない。やがて長女ゴネリルに彼女の邸から追い立てられた時、リアが彼女に怒って叫ぶ、

Ingratitude, thou marble-hearted fiend,

More hideous when thou show'st thee in a child

Than the sea-monster ! — I. iv. 281.

(忘恩という石の心の大悪魔、おまえが生みの子に宿って現われる時は、海の妖怪にもまして怖ろしく見えるわい！)

という言葉は、コーディリアの「Nothing」という言葉を聞いた時に、彼がコーディリアに抱いた気持と同じものをあらわしているはずである。そして右の言葉は、必然的に、リアにも、彼がコーディリアに絶縁を宣した時のことを思い出させ、

O most small fault,

How ugly didst thou in Cordelia show !

(おゝ、きわめて小さな過失、それがコーディリアの場合には何と醜く見えたことか。)

という言葉につながって、リアをはじめて反省の世界へ導くことになっている。しかし、リアが真に反省する人間になるのは、まだはるかに先のことである。

二

リアは、自己の最後の安楽のために王の職権を去り、王国を三分して娘たちに与えるつもりであったが、その贈与の儀式に立至って、末娘コーディリアの予期せざる返答に遭い、その場ではじめの計画を変更して、結局上の娘二人に国土を両分して与えた。しかしここでリアは、王という名儀または地位と、王に伴う職権とを分離して考えた。そして、彼が二人の娘およびその婿に譲ったのは後者であって、前者の方はこれをわが身に留保しておくつもりであった。実は譲って名は留めるつもりであった。

Only we still retain

The name, and all the additions to a king;

The sway, revenue, execution of the rest,

Beloved sons, be yours. — I. i. 137.

(ただ、国王という名、およびその他すべての称号は以後もわしがもらっておく。支配権、歳入、その他一切の統治の実権は、婿どの、あなた方のものだ。)

このように、名と実とを分けるところに、そして、その「名」を信奉するところに、リアの儀式主義がある。戯曲『リア王』は、「名」を信奉するリアが、「名」の空しきことを悟り、人間から、宇宙から、一切の「名」をはぎ取り、赤裸の自然を直視して、その赤裸の自然からまったく新たに彼の人間観と宇宙観とを建て直す過程を描いている。言いかえるならば、リアは、人間が人間の文化と呼んでいるもの一切を否定し、その一切を原始に返すことを余儀なくされ、そしてその原始の暗黒と渾沌の中から、もう一度人間性への萌芽を見出すことを課された人物である。一切の人間文化が壊滅し、それに代って原始が現われて来る時、リアは気が狂い、外界の自然は風雨と雷鳴と稲妻のあらしとなった。

ゴネリルから追われた後、次女のリーガンからも同じような追い出しを受けて出て行く時、リアは道化師をつかまえて、

O fool, I shall go mad. — II. iv. 289.

と、自己の狂氣を予感し、それと同時に、外界にもあらし (Storm and tempest) がきつた。

Corn Let us withdraw; 'twill be a storm. . . .

Glow Alack, the night comes on, and the bleak winds

Do sorely ruffle; for many miles about

There's scarce a bush.

Reg. ...Shut up your doors...

Corn Shut up your doors, my lord; 'tis a wild night:

My Regan counsels well: Come out o' the storm. —II. iv. 290.

コーンウォール 奥へ入ろう。あらしになりそうだ。

グロスター ああ、夜の闇がせまり、烈しい風がおそろしく吹き荒れる。このあたり数マイルの間は、ほとんど叢一つない。

リーガン 戸口を開けておしまい。……

コーンウォール 戸口をお開めください。ひどい晩だ。リーガンの言うとおりです。あらしを避けましょう。

こうして、リアの背後に人間社会の扉は堅く閉ざれ、彼は道化師一人を連れて、闇に包まれ、烈風吹きすさび、稲妻が光り、雷鳴の轟く、「ほとんど叢一つない」裸の荒野の中にさまよい出て行く。そしてそこで彼は、一切の「名」を剥いだ人間の実体を直視する。いや、彼自身がわが身にそれを体験する。狂人トムを装い、ほとんど全裸に近いエドガーを見て彼は言う。

Why, thou wert better in thy grave than to answer with thy uncovered body this extremity of the skies. Is man no more than this? Consider him well. Thou owest the worm no silk, the beast no hide, the sheep no wool, the cat no perfume. Ha! here's three on 's are sophisticated! Thou art the thing itself: unaccommodated man is no more but such poor, bare, forked animal as thou art. Off, off, you lendings! come, unbutton here. [*Tearing off his clothes.*—II. iv. 105.]

(や、おまえは墓へ入った方がましだ、そのはだか身をこんなはげしい荒天にさらすよりは。人間とはかくのごときものにならぬか。よくあの男を見ろ。おまえは、虫に絹も借りず、獣に皮も借りず、羊に毛も借りず、猫に辟香も借りていない。は、ここに外見を飾っている奴が三人いる！ おまえはありのままだ。何物もつけぬ人間とは、おまえのようにあわれな、丸裸の、二股に割れた動物にすぎぬのだ。取ってしまえ、取ってしまえ、この借りものを！ さ、このボタンをはずしてくれ。〔着物を引き裂くようにして捨てる。〕)

リアは一切の「名」を脱ぎすてて裸になった。それは人間が、自然の根源が人間を生み出したそのままの状態にもどることである。天地も渾沌たる中に、荒れ狂う自然力にさらされて、丸裸の身をふるわせていた一個の生きものとしての人間に返ることである。リアはそれを体験した。そしてその体験は彼の煉獄であった。彼は、一切の「名」を剥いだ時の人間が何であるかを、彼自身が何であるかを見た。かつて、「必要を論ずるな」と一喝し、人間は儀式をまとうことによって人間であると信じていた彼は、ここに痛烈な復讐を受けた。人間とはそもそも何であるか。それは実体に於て獣類と異なるものであるか。いや、何ら異ならないのだ。だからこそ、彼は気が狂うのである。人間が獣類と

異ならないことを彼に証明するものは、風雨にさらされたエドガーの裸体ではない。それは後から加えられた一つの傍証にすぎない。リアに、人間が獣類と異ならないということを真に証明するものは、彼自身の娘ゴネリルとリーガンに外ならない。

Filial ingratitude !

Is it not as this mouth should tear this hand

For lifting food to't? But I will punish home:

No, I will weep no more. In such a night

To shut me out! Pour on; I will endure.

In such a night as this! O Regan, Goneril!

Your old kind father, whose frank heart gave all,——

O, *that way madness lies*; let me shun that;

No more of that. —III. iv. 14.

(子にして親の恩を忘れるとは！ 食物を運んだと言つてこの口がこの手を噛み切ると同じではないか。しかし今に思い知らしてやる。いや、もう泣くまい。こんな晩に閉め出すとは！ もっと降れ。耐えて見せる。このような晩に！ おお、リーガン、ゴネリル！ おまえたちの、年老いたやさしい父を、惜しみなくありつたけをくれてやったこの父を——ああ、そんな風に考えると気が狂う。思うまい。もうそれは思うまい。)

ハムレットは、肉身の母親によって人間の獸性を、いや獸にも劣る人間の醜惡さを見せられ、彼の前に天日は輝きを失い、天地は瘴氣に満ちた。リアを渾沌として荒れ狂う暗黒の天地に投げ出したのも、同じく肉親の娘たちであった。ハムレットもリアも、それぞれに、天地に遍在する秩序を信じていた。宇宙にある秩序の觀念は、リアの場合に於ては、ハムレットの場合よりは、もっと前段階的なところでとらえられたそれであることは事實である。しかし、少くとも、リアは、たとえば、マクベスの「人間の掟がこの世を清めておだやかな世界にする前に」(Ere humane statute purged the gentle weal. — *Macbeth*, III. iv. 76.) という言葉の中にあるような意味での「人間の掟」の存在を信じていた。親子、兄弟、夫婦、君臣など、人間の基本的社会關係に於ては、支配と服従の倫理的關係がすでに確立しているものと信じていた。宇宙を支配する絶対者も、キリスト教の神とくらべてはなほ程遠いにしても、茫漠の彼方にその存在を認識されている。神を最高者かつ普遍者として、以下、天使、人間、獸類、植物、鉱物という宇宙の大位階が形作られ、その秩序の形態が宇宙の各部各所に於て反覆され、各部各所は緊密な連関と調和を保ち、かくて全宇宙は秩序の輝かしい一大綜合体系をなすという、中世キリスト教が描き出した壮麗な宇宙図は、むろんまだリアの眼には映っていない。しかし、われわれがリアの世界を考える場合には、それをはかる尺度として、そのような一つの完成された宇宙図を念頭に置く必要がある。シェイクスピアはそのような一つの理想的宇宙図から、いわば逆算を行って、やがてそのような秩序に到達すべき宇宙がその創生期にある元初の姿を想像し、それをリアの世界としていると考えられるからである。リアの世界は、善も惡もまだその名を得ない未分渾沌の世界から、ようやくにして一歩人間倫理の世界に入りはじめた段階の世界である。戯曲『リア王』が、リアと娘たち、グロスターと息子たち、

という二重の構造に於て、親と子というもつとも原始的な人間関係をその基盤としていることは、意義のあることである。

『ハムレット』は子の、『マクベス』は臣の、『オセロ』は夫の、『リア王』は親の、ドラマであるとも言い得る。すなわち、シェイクスピアは、彼のもつとも主要な悲劇に於て、常に、人間の社会的関係のもつとも基本的なるものを戯曲の骨格として据えている。そして、『ハムレット』と『リア王』とは、それぞれの骨格をなすものがともに親子の關係であることによつて、必然的にとくに類縁の濃いものとなっている。

ハムレットは、母親を媒介として、宇宙の秩序、したがつて人間の倫理、の壊滅を経験し、彼の意識に於て、時代の關節がはずれ、天日は光を失い、大氣は毒に満ち、世界は雑草の茂り放題にまかせた庭となった。一方リアは、彼の娘たちを媒介として、彼の体験に於て、天地は秩序を失つて原始の渾沌に逆転した。この両者の体験の内容は等質のものである。しかし、その様式と効果とは両者に於てかなり異っている。ハムレットに於ては、その意識はまだ十分に客観化されておらず、むしろ非限定的な気分となつて内攻するのに反して（T・S・エリオットは、シェイクスピアは『ハムレット』に於て正しい「客観的相關物」を発見し得なかつたと言っている）、リアに於ては、彼の意識は彼の言葉を通じて一そう明確に客観化され、彼のその意識の原因は一そう適確に突きとめられ、彼の意識は一そう限定的な対象に向つて怒りとなつて爆発することができるようになってゐる。いわば、ハムレットは一体何に對して怒つたらよいのかわからなかつたが、リアは、彼の怒りの対象を、彼が呪うべきものを、知つてゐる。電光が暗夜を引き裂く暴風雨の荒野にさまよい出た彼は叫ぶ。

Blow, winds, and crack your cheeks ! rage ! blow !

You cataracts and hurricanes, spout

Till you have drench'd our steeples, drown'd the cocks !

You sulphurous and thought-executing fires,

Vaunt-couriers to oak-cleaving thunderbolts,

Singe my white head ! And thou, all-shaking thunder,

Smite flat the thick rotundity o' the world !

Crack nature's moulds, all germens spill at once,

That make ingrateful man ! — III. ii. 1.

(吹け、風、汝の頬をやぶれ！ 荒れ狂え！ 吹きまくれ！ 汝、滝つ瀬よ、しけ降りの雨よ、水を噴け、尖塔を浸し、風見鶏を溺らせてしまふまで！ 汝、思想のごとく疾く走る硫黄の火よ、かしわをつん裂く雷電の前駆よ、わが白頭を焼き焦せ！そして汝、天地を揺さぶるいかずちよ、この厚く円い地球をべしゅんに打ちのめしてくれ！ 自然の鋳型を叩き割り、恩知らずの人間を作る一切の種子を流してしまえ！)

リアは、宇宙に生存する人類というものを呪い、永遠にその生殖の根源を絶ち、宇宙から人類を抹殺することを、造化の根源に向って叫び求めているのである。彼は、これより前、ゴネリルを呪って、造化の神が彼女の生殖の機関を枯渇せしめ、石女の性を植えつけることを、もしどうしても生むのならば、彼女と同様な不孝の子を生み、その子に

よって彼女が復讐されることを願った(D. iv. 286)。しかしその時は彼はまだリーガンを頼み得た。そのリーガンもまた、ゴネリルと合して、彼を拒否した時、リアの呪咀は、個人を超えて人類全体へと拡大し、人類全体の根絶を要求するものとなった。彼は人類に絶望し、自然がその蓄える人間の種子を絶滅し、この地上に一人の人間をも生み出さないことを、造化の根源に向って叫んだ。そして彼の白頭に吹きつける豪雨は、ノアをも生かさぬ洪水となって地を覆い、闇を裂く電光は、ソドムに降った破壊の火のごときものとなって、人類を全滅せしめることを願った。

三

ここでもう一度、リアが荒野で経験した世界を考えてみよう。

まずリアを取り巻く外界は、「ほとんど叢一つない」荒涼たる原野である。そして天地は濃い暗黒に閉され、その中を容赦なき風が吹きまくり、豪雨が降りそそぎ、電光が走り、雷鳴が轟く。「乳を吸いつくされた熊さえ潜み、獅子や飢えた狼も毛皮を濡らそうとしない夜」(This night, wherein the cub-drawn bear would couch,/The lion and the belly-pinched wolf/Keep their fur dry.—III. i. 12.) である。

そういう渾沌として荒れ狂う大自然の中で、道化師が寒さにふるえ、主人を失った老臣が浮浪し、狂人の仮装に身をかくした男が「二又に割れた」裸身を露呈し、両眼をくり抜かれた老人がたよりもなく闇の中によろよと道をたどる。それがこの荒野に生息する人間の姿である。そしてそういう人間どものすぐ近くには、熊や、獅子や、狼や、がまや、おたまじゃくしや、いもりや、どぶねずみなどが、一緒にうごめいている。もはや、人間も、野獣も、虫け

らも区別はなく、ごっちゃに入りまじって、それぞれただ生物としての条件を満足させているにすぎない。それではない、フリバーティジベツト、スマルキン、モードー、マーヒューなどという魔界の生物も、人間と指呼の間に跳梁している。しかも、人間はそれらの野性のもの、化性のものの中にまじって、それ自身を他から区別すべき何らのものも持っていない。それらとまったく同等同類のものとなって、天地五行の力にさらされてうごめいている。狂人トムを装うエドガーの言葉を借りれば、「怠惰なることは豚、狡猾なることは狐、貪慾なることは狼、狂騒なることは犬、残忍なることは獅子」なるもの (hog in sloth, fox in stealth, wolf in greediness, dog in madness, lion in prey. — III. iv. 95) 、それが人間という動物であるにすぎない。人間は野獣によって合成され、本性を野獣と等しくする。自然力に対する無力さに於て、人間が野のけだものたちに劣るともまさはることはないことをリアの眼に見せるものが、荒野に於てリアの周囲に集る人間たちであるとすれば、野獣と交らぬ人間の残忍性を彼に立証したものは、ゴネリルであり、リーガンであり、彼を荒野に追放した一切の人々である。ゴネリルやリーガンは、「はげたか」 (vulture) と呼ばれ、「いのしし」 (boar) と呼ばれ、「犬」 (dog) と呼ばれ、「きつね」 (fox) と呼ばれ、「虎」 (tiger) と呼ばれ、その他さまざまな野獣の名をもって呼ばれている。

中世のスコラ哲学 (たとえば、トマス・アクィナス) によって与えられた、宇宙に於ける人間の位置は、天使と野獣との中間にあった。純粹に理性の存在である天使と、理性を欠く野獣との中間に、人間はその位置を与えられた。ハムレットは、その中間的存在である人間を、むしろその上位の存在たる天使の方に近づけて考えていた。

What a piece of work is a man ! how noble in reason ! how infinite in faculty ! in form and moving

how express and admirable ! in action how like an angel ! in apprehension how like a god ! the beauty of the world ! the paragon of animals ! ——*Hamlet*. II. ii. 316.

(人間とは何という造化の傑作だろう！ その理性の高貴さはどうだ！ その能力の限りなきことはどうだ！ 形に於て動きに於て、何と整った驚嘆すべきものであらう！ 振舞いの天使に似たることはどうだ！ 理解力の神に似たることはどうだ！ 宇宙の美！ 万物の霊長！)

しかし、ハムレットの人間に対するこの理想主義は、母親の獸性を媒介として、無残に破壊された。そして、彼には人間とはただ「塵埃の精髓」(‘this quintessence of dust’)としか思われなくなり、一切の人間が彼を喜ばせなくなり、さらには、大地は荒涼とした岬の岩、天空は汚れて病毒にみちた気体の凝集のごとくにしか思われなくなって、彼は生きること一切の歡樂を失ってしまった。

リアもまた、人間をその下位にある獸類から分つ截然たる一線を信じていたことに於て、ハムレットと同様であった。そしていま荒野にあって、人間が野獸の範疇の中へ、いわば、何の支障もなく、入りまじって行き、そこに何らの区劃線もないことを知ったリアは、彼の人間觀を、ひいては彼の宇宙觀を、根本から裂かれたのである。ハムレットとリアの両者の體驗が、基本的には同質のものであったことは、すでに記したところである。そしてその體驗の衝擊は、両者とともに、狂氣に驅るものであった。

人間を、獸類との間にけじめのないものとして認識しなければならなくなったリアは、彼の儀式主義の非妥当性を知らされたのであり、さらに根本的には、彼の前に宇宙はその位階的秩序を失って、百鬼夜行、弱肉強食の修羅場と

化したのである。しかもそれらの百鬼のうち、もっとも瘴悪なるものが、人間という畜生であることを、ゴネリル、リーガンの二人の娘が、リアに立証しているのである。彼が造化の根源に向って、人間の種子を流してしまえと叫ぶのは、地上に棲息するもっとも悪辣なる畜生の根絶を願うからである。ゴネリル、リーガン、およびリーガンの夫コーンウォールが、よってたかつて、白髪老人グロスターの両眼をえぐり取り、それを足下に踏みにじるといふ阿修羅の行状(III. vii)も、人間と野獣の区別のつかなかったリアの世界観を傍証するものにすぎない。それは、いわば、人間がやっても少しもふしぎでも、不自然でもない行為なのである。いや、人間ならするはずの行為の一つにすぎないのである。

ハムレットは、右に引用した箇所直前に於て、彼は一切のよろこびを失ってしまったと語った時、「しかし、なぜだか知らない」(‘but wherefore I know not’)と言った。たしかにハムレットは、彼が陥った心理状態の原因を、自分に対して十分に明確になし得ていない。彼の心理状態は渾濁しており、効果のみ意識されて、その効果を招来した原因の分析に彼は成功していない。このハムレットの心理の渾濁をもって、ただちに作者シェイクスピアの心理の渾濁であるとし、この作全体を、正しい「客観的相関物」(‘objective correlative’)を発見し得なかった作者の詩的創造力の欠陥に起因する失敗作と断ずる T・S・エリオットの説(Hamlet)はやや性急で、にわかに同調したいが、ハムレットの心理がハムレット自身にとって不明確なものであることはわれわれも認めるところである。そしてハムレットに於て不明確のままに残されたものが、種々の夾雑物を除いて、その核心を洗い出されて来たならば、それは人間の根絶を叫ぶリアの叫びとなって進るべきものであったことは確実である。ハムレットに於ては、毒は内攻

したが、リアはおのれの血とともにその毒を外に吐いた。ハムレットはついにカタルシスを経験しなかったが、リアはそれを経験した。ハムレットは、はじめから終りまで、同じハムレットであったが、ありったけの毒を吐き出し、一眠りした後のリアは、その前のリアとはちがったリアになっている。リアには、ハムレットになかった解消感が伴っている。ハムレットの胸の中に鬱積したものが、リアによって吐き出され、かつ解消させられているということができる。そしてその解消感が、シェイクスピアの最晩年の諸作の基調をなすものとなっていくのである。

リアは人間をその根源から呪うがゆえに、彼の描く心象が、たえず生殖に結びつく傾向のあることは、きわめて自然なことである。彼はゴネリルを呪って言う、

Hear, nature, hear ; dear goddess, hear !

Suspend thy purpose, if thou didst intend

To make this creature fruitful !

Into her womb convey sterility !

Dry up in her the organs of increase ;

And from her derogate body never spring

A babe to honour her ! — I. iv. 297.

（聞け、「自然」の女神よ、聞きたまえ！ もしこの女めをして子を生ましめん御心ならば、その御意を止めたまえ！ この女の子袋には不妊の性を植えつけたまえ！ この女のうちに生ずる生殖の器官を枯渇せしめ、その下落せる肉体よりは、これが母た

ることを誇るべき一人の赤子をも絶えて生ましまうな！)

しかも、このように叫ぶリアの心の背後には、彼が呪うこのゴネリルが、他ならぬ彼の肉親の娘であること、彼女をこの世に生み出したものが自分であること、彼女は自分から生い出たものであるという意識が、たえずつきまとっている。

But yet thou art my flesh, my blood, my daughter;

Or rather a disease that's in my flesh,

Which I must needs call mine: thou art a boil,

A plague-sore, an embossed carbuncle,

In my corrupted blood. — II. iv. 224.

(とは言っても、おまえはわしの肉、わしの血、わしの娘だ。と言うよりも、わしの肉にひそむ病、だがわしのものと言わなければならぬものだ。おまえは、わしの腐った血にひそむきものだ、わるいかさだ、うんだ腫れものだ。)

これは、母親の獣性とけがれを、ただちに自分の獣性とけがれとして受け取るハムレットの意識と同じもので、それをもたらしした動機としての親子関係が逆になっているだけである。そして、ハムレットは母親を責めなかった。いや、責めようとすれば、亡父の幽霊がそれを彼に禁じた。幽霊は、叔父のクロード・ディアスに対して復讐することをハムレットに求める反面、母親ガートルードに対しては、彼女を「天と、彼女の胸の中に宿るとげ」にのみ委ねるべきことをハムレットに命じた。リアも、右に引用した部分に引きつづいて、彼があえてゴネリルを責めないことを述べている。

But I'll not chide thee;

Let shame come when it will, I do not call it:

I do not bid the thunder-bearer shoot,

Nor tell tales of thee to high-judging Jove:

Mend when thou canst; be better at thy leisure:

I can be patient. — II. iv. 228.

(しかしわしはおまえを叱らぬ。恥かしいと思う時に思え、わしから求めはせぬ。雷の神に打ち殺してくれとも頼まぬし、上天の判官ジョーヴにおまえのことを告げ口もせぬ。おまえができる時に改心するがいい。そのうちひまな時に善人になれ。わしは耐えしのぶことができる。)

リーガンによって、彼の肉の病と血の膿とをもう一度見せつけられて、彼の気が狂うまで、リアはゴネリルを責めたい。ゴネリルだけを責めるわけにはいかないことを、彼は知りはじめたからである。彼は、自分をも含めて、人間というものの認識を改めなければならなくなった。もし人間というものが、その必然的な一部として、ゴネリルを含まなければならないとすれば、ゴネリルを処理することは人間にはできないことで、それは人間を超えた何ものかの力に委ねるほかにはない。ハムレットは、元来、母親を責めることができないし、リアは、元来、ゴネリルを責めることができないのである。

コーディーリアに対しては、自分に縁なき化性のものとして、これに絶縁を宣することで事態を切り抜けたと思っ

たリアは、ゴネリルによって、そのような絶縁の不可能であることを意識させられはじめた。しかし、まだリーガンが残っていた。親子の絶縁がついに不可能であることを意識すればするほど、もしこのリーガンが、まさしく「人間」であることを立証してくれるならば、リアは何よりもまず自分が救われたと思うであろう。しかし、リーガンは彼の最後の願いを裏切った。ここに於て、「ゴネリル・リーガン」は、人間に含まれる一部ではなく、それは人間の全部となった。ゴネリル一人を呪って、その呪いの十分に妥当でないことを意識したリアは、ゴネリルに加えたのと同じ呪いを、人類全体の上に押しひろげて加えた時に、彼は彼の行き着くべき体験の一つの極点に到達したのであり、彼の呪いははじめて彼にその妥当性の不足を意識させないのである。彼は、荒野の暴風雨が彼の体を打ち、ひらめく雷電が彼の白頭を焼きこがすことを求めつつ、同時に、その雷電が、一切の人類を永遠に根絶せしむべきことを願うのである。

そして汝、天地を揺さぶるいかずちよ、この厚く円い地球をべしゃんこに打ちのめしてくれ！ 自然の鑄型を叩き割り、恩知らずの人間を作る一切の種子を流してしまえ！

ゴネリルの子宮と生殖の器官は、ここで、孕んだ地球の腹と造化の鑄型に置きかえられて、彼の呪いは人類全体への呪咀へと一般化するのである。

現実と幻想との区別のつかなくなったリアは、荒野の真中で、自分がふたたび昔日の王に返ったような妄想を抱き、幻の罪人を裁いているような気になる。この時彼の脳髓に固執するものは、人間への苦い絶望と唾棄である。彼にとって、人間の生殖は、もはや、うじ虫の繁殖と何らえらぶところはない。

What was thy cause ?

Adultery ?

Thou shalt not die : die for adultery ! No :

The wren goes to 't, and the small gilded fly

Does lecher in my sight.

Let copulation thrive ; for Gloucester's bastard son

Was kinder to his father than my daughters

Got 'tween the lawful sheets.

To 't, luxury, pell-mell ! for I lack soldiers.

Behold yond simpering dame,

Whose face between her forks presages snow ;

That minces virtue, and does shake the head

To hear of pleasure's name ;

The fitchew, nor the soiled horse, goes to 't

With a more riotous appetite.

Down from the waist they are Centaurs,

Though women all above.

But to the girdle do the gods inherit,

Beneath is all the fends';

There's hell, there's darkness, there's the sulphurous pit,

Burning, scalding, stench, consumption; fe, fe, fe! pah, pah! Give me an ounce of civet, good apothecary, to sweeten my imagination: there's money for thee. — IV. vi. 111.

(その方の訴えは何だ。姦通! 死刑にはせぬ。姦通で死刑! ばかな。みそさざいもする、小さい金光りの蠅もわしの眼前でつるんでおるわ。さかんに交わるがいい。現に、グロスターの不義の息子は、正当な寢床の中でこしらえたわしの娘どもよりその父親に孝行であつたわい。やれ、好き者ども、めちゃくちやにやれ! 兵士が足らんからな。見ろ、あの作り笑いをしている奥方を。股の間のその顔は、雪のように清浄だと言わんばかり。いかにも貞女の風で、色事の名を聞くもけがらわしいと首を振る。ところがどうして、におい猫も、青草を腹一杯食った馬もそのけの勢で、あの方にはむしろぶりつくのだ。腰から下は半人半馬の獣、上の方はすっかり女でも。帯のところまでだけ神々の領分で、それから下はことごとく悪魔の所領。そこらは地獄だ、闇だ、硫黄の燃えている穴だ。炎々とあたりをこがし、悪臭、腐爛。きたない、きたない! ベっ、ベっ! じゃ香を一オンスくれ、おい生薬屋、胸糞をなおすのだ。それ、代金だ。)

もはやリアの前からは、一切の儀式、人間を獣から区別するすべてのものが消え失せた。この世は、小鳥も、蠅も、猫も、馬も、人間も、区別なく雑居して、飽くことなく生殖の本能を遂行しているだけにすぎない。要するに、リアの眼前に展開するこの世の姿は、畜生道の姿にほかならない。すべてが畜生である。

右にうつへ部分に於て、リナは盲目のベロスターをいひかへて、知ふに語らうてゐる。

Lear. Look with thine ears : see how yond justice rails upon yond simple thief. Hark, in thine ear change places ; and, handy-dandy, which is the justice, which is the thief ? Thou hast seen a farmer's dog bark at a beggar ?

Glou. Ay, sir.

Lear. And the creature run from the cur ? There thou mightst behold the great image of authority : a dog's obeyed in office.

Thou rascal beadle, hold thy bloody hand !

Why dost thou lash that whore ? Strip thine own back ;

Thou hotly lust'st to use her in that kind

For which thou whip'st her. The usurer hangs the cozener.

Through tatter'd clothes small vices do appear ;

Robes and furr'd gowns hide all. Plate sin with gold,

And the strong lance of justice hurtless breaks ;

Arm it in rags, a pigmy's straw does pierce it.

None does offend, none, I say, none ; I'll able 'em. — IV. vi. 154.

リア その方の耳で見よ。あそこにおける裁判官があそこにおける平民の泥棒をどなりつけているだろう。よく耳で聞け。位置交替だ、そして、えっさっさ、それ、どっちが裁判官で、どっちが泥棒だ。その方は農家の犬が乞食に吠えつくのを見たことがあろうが。

グロ はい、ございます。

リア その乞食が大めから逃げ出したとしたら？ すなわちそれが官権というものの偉大なる図だ。犬も職権に立てば服従される。そこな小役人、そのむごい手を止める！ なぜその売女に答を加えるのだ。おまえこそ肌をぬいで背中を出すがいい。淫を売ったときさまその女を答打っているが、実はその女を買いたくて助平根性を燃やしておろうが。高利貸が詐欺師を絞首刑にする。ぼろを着ていると、小さな悪徳も破れ目からすいて見えるが、大礼服や毛皮の被衣をまえば、何もかもかくれる。罪惡に黄金の鎧を着せれば、法の強力な槍先も、傷つけずに折れる。それをぼろで鎧えば、小びとのわらしべもこれすらぬく。罪人は一人もいない、誰一人いない、一人もいないのだ。わしが保証する。）

人間もみな畜生だとすれば、もはや、善も惡も、法も不法もない。うじ虫のようにただうごめいて、食って、睡んで、死んで行くだけだ。人間であることの特別の意味は何もなくなる。この世に生れ出ること自体がすでにむだである。

When we are born, we cry that we are come

To this great stage of fools. — IV. vi. 186.

（われわれは生れ出る時泣き叫ぶ、阿呆ばかりのこの大舞台に出て来たかと。）

とリアは言う。

リアを捉えた、このような暗黒と否定の世界は、そこに至る過程に於て、リアの儀式主義を破壊し、彼に人間の本

質的平等と、そこから来る同胞的仁慈を教えた。しかし、それによってリアは救われているわけではない。彼がそのような過程に於て、人間の平等と仁慈の心を学んだのは、一つの皮肉であつて、それが暗黒と否定の世界觀を論理的基礎とするものであり、ただそれを先廻っているだけだとすれば、それは真にリアを救うものであるとは言ひ得ない。しかし、リアは救われる。真に救われる。そしてリアを真に救ったものは、コーディーリアという人間の存在にほかならない。しかし、論点をコーディーリアに移す前に、われわれはもう一つリアの世界について考察しておかなければならない。

四

以上に示したとおり、リアの体験した世界は、大自然も、国家も、人間社会も、リア個人も、すべて乱れて狂い、秩序と統制を喪失した渾沌の世界であつた。大自然は暴風雨と雷鳴となつて荒れ、国家は分裂して統治系統を失い、戦乱に陥り、人間社会は、親子、君臣、兄弟の道を破壊され、残虐と姦淫に満ちて、獣の世界と混肴し、リア個人は理性を覆されて狂乱した。世界は神の光被と秩序とを失つて、いわば原始野蠻の暗黒の世界へと転落した。

それならば、世界をそのような状態に転落させる動機となつたものは何であつたであらうか。第一幕第二場で、グロスターは言っている。

These late eclipses in the sun and moon portend no good to us: though the wisdom of nature can reason it thus and thus, yet nature finds itself scourged by the sequent effects: love cools, friendship

falls off, brothers divide: in cities, mutinies; in countries, discord; in palaces, treason; and the bond cracked 'twixt son and father. This villain of mine comes under the prediction; there's son against father: the king falls from bias of nature; there's father against child. We have seen the best of our time: machinations, hollowness, treachery, and all ruinous disorders, follow us disquietly to our graves. — I. ii. 112.

(最近の日蝕や月蝕は不祥事の前兆だ。学者はあまのこうのと理窟をつけるが、結局万人はその結果に苦しめられるのだ。愛は冷め、友誼はすたれ、兄弟は仲たがいする。都市には反乱、地方には騒動、宮中には逆賊。そして父子のきずなが切れる。わが家の悪党〔エドガー〕もこの予言の中に入る。父に背く息子だ。王も自然の道から逸れた振舞をされる。すなわち子に背く父だ。世は末世となった。たぐらみや、不実や、裏切りや、その他破滅をもたらすまじまの無秩序が、墓場までついて来てわれわれの心をかき乱す。)

ここには古風な運命論者の無気力な末世観がある。そしてそれはただちに庶子エドマンドによって嘲笑の的とされる。This is the excellent foppery of the world, that, when we are sick in fortune,——often the surfeit of our own behaviour,——we make guilty of our disasters the sun, the moon, and the stars: as if we were villains by necessity; fools by heavenly compulsion; knaves, thieves, and treachers, by spherical predominance; drunkards, liars, and adulterers, by an enforced obedience of planetary influence; and all that we evil in, by a divine thrusting on: an admirable evasion of whoremaster man, to lay his

goatish disposition to the charge of a star! My father compounded with my mother under the drag-on's stall; and my nativity was under Ursa major: so that it follows, I am rough and lecherous. Tut, I should have been that I am, had the maidenliest star in the firmament twinkled on my bastardizing. — L. ii. 129.

(大べらぼうな話だ、運がわるくなると、——大抵自業自得のくせに、——その禍は太陽や月や星の罪にする。人間は必然の作用で悪人になるとも言うように。阿呆になるのも天体の圧迫、悪党、盗賊、謀反人となるのも星廻り、呑んだくれも、嘘つきも、間男も、是非なき星の影響、その他人間の犯す悪という悪は天の強制。好き者のまったくいい逃口上だ、その助平根性を星のせいにするとは！ 親父とおふくろが睦んだのは竜尾点の下、おれが生れたのが大熊星の下、だによって、おれは気が荒く、色を好む。なんと、よしんばおれの生れるとき、大空一番貞潔な星が光っていたとしたところで、おれはまさにこのとおりの人間になったに相違ないわ。)

エドモンドは徹底した現実主義者であり、既成の秩序の観念を否定し、代って生物学的優勝劣敗の原理を信奉する男である。正嫡の兄エドガーに生得的資質に於て優ると自信する彼は、既成の道德と法とによってエドガーの有するものとされる一切の権利を自分の手に収めることこそ、自然の理に忠実であると主張する。しかし、シェイクスピアは、エドモンドのこうした思想を肯定しなかった。エドモンドは、シェイクスピアによって、確実に悪人とされており、彼の思想は、この戯曲に於て、排撃されるべきものとして提出されている。グロスターの無気力な、形骸化された運命論の空しさが批判されると同時に、エドモンドの生物学的世界観も否定されている。エドモンドの生物学的世界

観も、一種の運命論にほかならない。両者は相反することを言っているようで、その実は同じである。占星学が生物学に置き換えられているだけにすぎない。シェイクスピアは、その両者を同時に排除しつつ、宇宙に遍在すべき秩序の觀念を信じていた。それは、グロスターに見るごとき、消極的な、受身的な思想ではなく、各自の心の中に生動し、存在と成長との原理となり、原動力となるべき、「生きた」思想としてそれを信じていた。彼に於て、「悪」とは、宇宙に遍在する神の秩序に背いているもの、これを覆えす方向を指向するものの呼称にほかならない。そして、リアの体驗した世界は、一言にして言うならば、「悪」の世界にほかならない。

しからば、何がその「悪」の世界をもたらしたか。グロスターの言うがごとく、人間の責任を超えた日月の影響にその原因を帰することは、エドモンドからさえ嘲笑を買うことになる。

ここで、われわれはこの戯曲の発端をかえりみる必要がある。この戯曲は、国王リアが、国を三分して三人の娘に与えようとするところから始まっている。それはまさにこの戯曲の発起点なのであって、リアのこの国家三分の意志にこそ、以後の「悪」の世界の展開を許すそもその契機がひそんでいたのである。

今日の国家に当るものを、中世からルネッサンスにかけては、「政治体」(body politic) と呼ぶ場合が多かった。

国家は、人体にたとえられる有機体として考えられていた。国王はその有機体の中枢かつ最高に位するもので、その地位は神聖にして犯すべからざるものとされるとともに、反面、国王はみづからその有機体のすべての部分に対して統治を行う責任を持つものであった。「政治体」に対する国王の關係は、全宇宙に対する神の關係にひとしいものと考えられていた。国王は、グロスターも言うごとく(III. vii. 57)「聖油を注がれた」(anointed) 国王であった。マ

クベスは、かかる神聖なる王を弑し、その王位を横奪することによって、神の秩序を乱し、みずから進んで悪の世界に没入して滅んだ。『ハムレット』に於ても、クロード・ディアスによる王位横奪が、「時代の関節がはずれ」た根本の原因であった。シーザーが倒される時、ローマには天変地異があらわれ、混乱が続いた。史実の順序に従えば『リチャード二世』、『ヘンリー四世』、『ヘンリー五世』、さらに『ヘンリー六世』、『リチャード三世』とたどられる、シェイクスピアの史劇に於て、そこに見出される基本的テーマは、正統の王位を覆滅することによって生じた混乱と、その混乱の後の正しい秩序の回復である。

『リア王』に於てリアの体験した世界も、秩序の崩壊した混乱の世界であった。「悪」の世界であった。そしてその「悪」の世界を作り出す動因となったものは、リア自身にはかならなかつた。正統の王ならざる者が王の位につくことが神の秩序を乱す行為であるのと同じく、正統の王が、みずから治むべき「政治体」を勝手に分割することは、整然たる秩序の有機体を破壊する行為であつて、神の意志に反する。リアは、神が包摂する自然の一角に於て、神の秩序を乱した。分割の仕方が問題なのではない。分割することそれ自身が秩序を乱す行為であつて、それは必然的に混乱を生む原因となることである。

リアと同じ過ちを犯した人間にゴードラックがある。戯曲『ゴードラック』(Gorduck)は、一五六一年に初演され、一五六五年に不良本が出版され、一五七〇年に改良本が出されたという古い戯曲で、英国に於ける最初の本格悲劇として、また無韻詩(Blank verse)で書かれた最初の戯曲として、英文学史上よく知られた作品である。作者はトマス・ノートン(Thomas Norton, 1532—84)とトマス・サックヴィル(Thomas Sackville, 1536—1608)で、二

人の合作に成るものである。はじめの三幕をノートン、残りの二幕をサックヴィルが書いたものとされている。この二人はともに当時の政界に活躍した人で、ノートンは王位継承問題について議会で演説したり、エリザベス女王によって、カトリック教徒審問官に任ぜられたりした。サックヴィルは、スコットランド女王メアリの処刑や、エセックス伯の大逆事件に裁判官として関与し、後に大使や大蔵大臣を歴任、爵位を受けている。サックヴィルはまた、『奉行の鑑』の「序説」その他の筆者としても知られている。

ゴードバックは、リアと同じく、古代ブリテンの王である。彼にはフェレックス(Ferrex)とポレックス(Porrex)という二人の息子がある。ゴードバックは、自分がすでに老齢に達したことをさとり、リアとまったく同じように、彼の國土を二分して息子たちに与え、その統治ぶりをたのしみに眺めながら老後を安樂の中に送ろうと考える。

When fatal death shall end my mortal life,

My purpose is to leave unto them twain,

The realm divided into two sundry parts :

The one Ferrex mine elder son shall have,

The other shall the younger Porrex rule.

That both my purpose may more firmly stand,

And eke that they may better rule their charge,

I mean forthwith to place them in the same ;

That in my life they may both learn to rule,
And I may joy to see their ruling well. — I. ii. 58.

(宿命的な死がわが生命を終わらせる時が来たら、わしは国土を二分して二人の息子にゆずるつもりである。一半は長子フェレックスに与え、他の半分は次男のボレックスに治めさせる。この意図を一そう明確にするため、また兩人がそれぞれの分担を一そうよく治められるようにするため、わしはただちに兩人をその職責につけるつもりである。わしの存命中に兩人が統治の法を知り、かたがた、兩人のよく治めるを見てわしのたのしみとするためだ。)

ゴロバダックのこの意図に、重臣(じゅうしん)とよく賛意を表する中であって、ひとり、王の秘書官ユーバラス(Eubulus)だけは、それが国家の安全('the safety of your common weal')を害する所以であると主張して、王の再考をうながす。

To part your realm unto my lords, your sons,
I think not good for you, ne yet for them,
But worst of all for this our native land.
Within one land, one single rule is best:
Divided reigns do make divided hearts,
But peace preserves the country and the prince.
Such is in man the greedy mind to reign,

So great is his desire to climb aloft,

In worldly stage the statelest parts to bear,

That faith and justice, and all kindly love,

Do yield unto desire of sovereignty,

Where equal state doth raise an equal hope

To win the thing that either would attain.

(御領国を親王さま方に分ちお与えになりますのは、陛下のためにも、親王さま方のためにもよからず、されどなかんずくこのわれらが祖国のためによからずと存じます。一国の内には、治者ただ一人あるをもつて最上といたします。宗主の分かれる時は人心また分かれるが習い、しかれども平和のみよく国と君主の安泰を保ちます。およそ人たる、君臨せんことを望む欲心強く、高きに登らん志、この世の舞台に於てできるだけ威儀そなわる役を演じたい欲望強きものなれば、忠誠も正義も、はたまた人間相互の愛も、宗主たらんとする欲望には屈し、等しき国家はともに等しき望みを発し、双方が得たしと欲するものをたがいにかち得んとするに至るものであります。)

しかし、ユーバラスのこの諫言は、王ゴードダックの容れるところとならず、国土は二分されて二人の王子に与えられる。すると兄弟の王子は、たちまちたがいに相手に対して疑心を抱きはじめ、相手が自分の所領を併呑しようとしていたのではないかと恐れる。そして弟のボレックスは、相手の機先を制するつもりで、兄フェレックスを殺害する。すると、もともと長子の方を偏愛していた母后のヴィデナ(Videna)は、このことを聞いて大いに悲しみ、その

ような人殺しはわが子でないと、はげしくボレックスを呪う。ボレックスは父ゴーボダックに適當の処置を願って、一室に退いて眠るが、眠っているすきに、怒り狂った母親の手によって刺殺される。王家に起ったこの不祥事を知った人民は、蜂起して反乱をおこし、ついに老王ゴーボダックとその后を弑する。この反乱は貴族たちによって鎮定されるが、もはや王位を継ぐべき者が絶えてないため、貴族の間に勢力が割れて国内に内乱が相つぎ、その内乱の間にかれらおよびかれらの子孫も多く戦死し、国土は長い間にわたって慘澹たる荒廢にまかせられる。

この『ゴーボダック』という劇は、はじめ法学院で上演された後、一五六一年一月十八日に、ホワイトホールでエリザベス女王の前で上演された。当時のイギリスの政情にはなお不安が多く、第二のバラ戦争が起らないという保証はないと感ずる人も多かった。シェイクスピアが史劇に於てとくにバラ戦争に関心を寄せていることは誰にもわかることである。女王の前で『ゴーボダック』を上演せしめた二人の作者の側に、なかなか配偶者を決めようというしない女王に対して、何かとくに訴えようとする意図があったかどうか、興味をひかれるが、そこを確定すべき証拠はない。

国土とその統治權を分割することが、単に國家を混亂と荒廢に陥らせるばかりでなく、それが全宇宙の混亂と荒廢に拡大して行くところに、シェイクスピアの詩的想像力の特徴がある。全宇宙は神を頂点とする秩序の一大体系をなし、その秩序の様式は、宇宙の各部分に於て、規模を縮小して反復されるというのが、自然の秩序の靜的な形態であるとするれば、全宇宙は同時に各部分を綜合する一大有機体をなし、その一角に於ける秩序の紊亂は、ただちにその全体に波及し、宇宙全体の混亂を招来するのである。リアが国土を分割し、統治の系統を乱すことによって、彼が國家に惹き起した混亂は、結局地上に人獸妖魔區別なく混淆する暗黒の世界を生じ、天もまた烈風、豪雨、雷鳴入りまじ

る混乱となり、人倫もことごとく乱れて荒廃し、リア個人の小宇宙も攪乱されてリアは狂人となった。

リアが体験した世界とは、リアみずからが動機となって現出された世界であり、それは全宇宙を捲き込んだ混乱と暗黒の世界であった。

狂乱したリアに荒野で出会ったグロスターは、その時のリアのさまを

O ruin'd piece of nature !

(おゝ、破滅せる自然の一角よ！)

と叙し、つづけて

This great world

Shall so wear out to nought. — IV. vi. 137.

(この大世界もこのようにして無に帰するのだ)

と述べている。

五

リアが荒野で体験した世界は、全宇宙が秩序を失い、暴力と残忍と淫乱と狂気とが天地を覆って渦巻く、暗黒のケイオスであった。それはシェイクスピアが描いたもつとも壮大な地獄図にほかならない。その暗黒の力は全宇宙を覆って拡がり、天地の間にある一切のものをその中に巻き込み、一切のものがその支配に屈した。人間のうち、ゴネリ

ル、リーガン、エドモンド、コーンウォールなどは、その力に合体し、その力に乘じた存在である。ケント、エドガー、グロスター、オールバニーなどは、それぞれの仕方と程度に於て、この力に抗しながら、それに対してはついに何事をもなし得ず、無力のままに翻弄され、自己を失った敗残者である。それは、圧倒的な悪の力の前に破壊され、押し流される善の破片のごときものである。かれらは、悪の力を受苦する対象であつて、悪の力に對抗する主体ではない。グロスターの眼を二つまでえぐろうとする主人コーンウォールの非道に耐えられず、これに切りつけ、逆に一命を落した名もなき従者の方が、悪に對抗する積極性に於ては、むしろかれらにまさつていた。

天地を覆う渾沌と暗黒の中にあつて、濁流の中の孤岩、暗夜にとる一点の灯のごとく、毅然として自己を守りつづけた存在が一つあつた。万物が暗黒の力に侵蝕される中であつて、何ら変質することなく、終始本来の自己を変えず、変転の中にあつて不動に止つた存在が一つあつた。言うまでもない、コーディリアである。そしてわれわれは、コーディリアの中に、滔々たる悪の力、暗黒の勢に對抗する真の力、善と光明の唯一の力を見出すのである。彼女が夫とともに軍を率いて、現実には悪の討伐に向つたということは、この際、それほど本質的な問題ではない。本質的な問題は、コーディリアという存在そのものにある。

リアは娘たちの彼に対する愛情をためし、二人の姉妹たちの美しく飾つた言葉にひきくらべて、コーディリアからはただ「Nothing」のみのうたへ答を得た時、リアは即座に彼女を追放した。儀式を人間の本質的特徴として、これを信奉していた彼にとって、コーディリアの返事は、人間の言葉にはならないものだった。彼は、自分から生れたものであるだけそれだけ一そう不気味な化性のものに、一気に絶縁を宣するようにして、彼女をわが身から振り落し

た。

リアが、コデーリアの“Nothing”の意味を理解し得るまでには、彼は、彼の儀式主義を根底から破壊され、人間の本性を直視する、あの荒野での体験を経なければならなかった。いや、リアの荒野での体験が、コデーリアの“Nothing”の意味の理解に到達するためのものではなかったならば、リアのその体験は意味のないものであり、あるいは誤った体験ですらあったであろう。人間が身につけている一切の虚飾を、あるいは人間がそれまでに築いて来た一切のものを、ことごとく人間から剥ぎ取り、人間を他の生物たちとかきまぜて、これを原始の世界の中に投げ込み、その状態でふたたび改めて人間を見た時、果して人間は、他の生物から区別されてやはり人間とする以外にはない何ものかを具有しているであろうか。人間は本来的に野獣ではなく人間であるのか。人間性の種子は、自然の渾沌たるるつぼの中に、それ以外のものとしてではなく、確実にそのものとして存在するのであるか。『リア王』という戯曲は、シェイクスピアが、存在のもっとも深い根源に於て、人間なるものの存否を問うている作品である。それは、伝統的な秩序の観念に対して、これを疑えるだけ疑って、その最後のぎりぎりのところで、その真否を問うている作品である。

リアは、彼が信奉して来た儀式の虚妄を悟らされた時、彼は人間という範疇を認めることができなくなり、人間という範疇が認められないかぎりには、整然たる秩序の体系としての宇宙を信じられなくなり、彼の前に世界は崩れ落ちて、暗澹たる渾沌と化した。そこでは、生命とエネルギーとが、その性を残忍癡猛なるものとしてあらわし、何の規範も統制もなく、その荒々しい性のままに活動しているだけにすぎなかった。荒野に於てリアが体験した世界とはか

くのごとき世界であつた。リアはおそらく人間の体験しうる最大の幻滅と絶望の世界に突き落されたのであつて、彼が発狂したということは、彼が死ななかつたのであるかぎり、彼の身の上に起り得るもっとも当然な結果であつたと言ふはかはない。

しかし、もしリアが救われるべきものであるとするならば、それは狂乱したリアに来ることは不可能である。狂人に救いということは、真の意味に於ては、ありえないことだからである。リアに救いが来るとすれば、それは正常の意識にある彼に來なければならぬ。シェイクスピアに於て、眠りは、心身の病を癒す、自然が与えた最高の良薬と考えられているが、リアもそのような眠りをめぐまれて、侍医の保証するがごとく、「はげしい乱心はまったくしづまつた。」(The great rage/You see, is kild' in him. — IV. vi. 78.) として、心のもうろうたる霧がはれるように、次第に正常な意識がさめて來た時、彼がそこに見出したものは、コーディーリアであつた。彼が最後に見たコーディーリアと少しも変らぬコーディーリアであつた。

Lear ...Do not laugh at me;

For, as I am a man, I think this lady

To be my child Cordelia.

Cor. And so I am, I am.

Lear. Be your tears wet? yes, 'faith, I pray weep not;

If you have poison for me, I will drink it.

I know you do not love me; for your sisters

Have, as I do remember, done me wrong;

You have some cause, they have not.

Cor.

No cause, no cause. — IV vii. 68

リア 笑わんでもらいたい。だがたしかに、この方はわしの娘のコーディーリアのように思うが。

コーデ そうでございます、そうでございます。

リア 涙を流しておいでかな。たしかにそうだ。どうか泣いてくださるな。あなたが毒を飲めと言えば、わしは飲む。あなたはわしを愛してはおらんはずじゃ。と言うのは、どうやら、あなたの姉たちはわしにひどい仕打ちをしたようにおぼえているからだ。あなたには理由があるが、あの者たちにはないのじゃ。

コーデ 理由など、何一つ、何一つ、ございません。

ここにリアは、はじめて、変化するものの中にあつて変化しないものを見た。彼が信じ、頼ることのできるものを見た。そして、この変化しないコーディーリアの存在によって、宇宙の中に、人間性として明確に識別しうるものが、確実に存在するものであることを、リアは実感することができた。獣の中に溶解してしまわない、人間性の核が、たしかに世界に存在するものであることを信じ得た。彼は、人間というものが、虚妄ではなく、実体として存在するものであることを最初とは異なる新たな形で再び確認し得た。そしてリアは救われた。

はじめにリアから愛情の程度を問われて、コーディーリアが「Nothing」としか答えられなかったのは、有限なる

ものは形を取り得るが、無限なるものは形を取り得ない、ということに關係している。物を叙述して行くことは、そのものをますます特殊化し、個性化し、相対的なものにして行く。コーディーリアがリアに対して抱いているものは、人間という自然が抱くそのままでのものであって、それが表現されるさまざまな形を個別的な現象として叙述することはできても、それらの現象のすべてを可能とする根本の実体は、言葉による陳述を拒否するがごとき性質のものである。しかし、言葉はそれをしも表現しなければならぬ。そして、それを表現するために、コーディーリアが苦心してさがし出した言葉が「Nothing」であった。この「無」は、一切の「有」を可能態として含むがゆえの「無」である。したがって、コーディーリアの「Nothing」という返事を聞いて、

Nothing will come of nothing.

と言ったリアは、コーディーリアをまったく正反対に誤解することになったのである。

コーディーリアが父親リアに対して抱いているものは、そのようなものを抱いているコーディーリアがこれを言葉で表現しようとすれば、「Nothing」という言葉以外には適当な言葉がなかった。人間性の中に先天的に存在し、それが獣性に対する人間性の定義となるような、不動にして無限定なるものを、人間性みずからが述べようとするならば、その言葉は「Nothing」とならざるを得ない。いかなる数も、固定と限定と相対性とを伴う時、それらの制約を超越して、しかもそれらすべての数を存在せしめる基点を考えるならば、それは数にして数にあらざる「零」となるであろう。しかし、彼女の「Nothing」はリアに理解されないことがわかった。コーディーリアは苦慮して、できるだけそれを説明しようとする。

Unhappy that I am, I cannot heave

My heart into my mouth: I love your majesty

According to my bond; nor more nor less.

(不仕合せなわが身は、心にあることを口にのぼすことができません。わたくしは陛下をわたくしの負うつとめのままに愛しております。それ以上にでもそれ以下にでもなく。)

もちろん、これでも、リアにはコーディーリアがわからない。もう一度言い直しを命じられても、コーディーリアは、親子の間にある自然の道に従う、ということをしかな言うことができない。すなわち、彼女は、いかなる条件の変化にも左右されない絶対の自然的真理に立っているのである。

So young, and so untender?

(それほど若くして、それほどにやさしい情を欠くのか。)

とリアに問われて、彼女は、

So young, my lord, and true.

(若うございますが、真理を申しております。)

と答えている (I. i. 109)。

真理は不動である。親子の間の、人倫の、自然の、真理に立つコーディーリアは、自己を逸脱して父親の意に迎合することができなかったと同じように、父親に憎めと言われても父親を憎むことは不可能である。リアに対する彼女

の關係は、彼女の愛は、すでに述べたように、条件の変化の影響から絶縁された絶対の場所にある。彼女は、リアに彼の儀式主義の虚妄を悟らせると同時に、宇宙の中に人間というものが存在することを彼に對して証明し、そのことによって、宇宙に秩序のあることを立証した。宇宙が本体に於てケイオスでなく、やはりコスモスであることを信じ得た時、しかも、一そう深まった認識によつてそれを確認し得た時、リアは救われた。宇宙の根底に常住不変の秩序が存在することを信じ得た彼は、現実の世界がその時に呈する相貌などは、実はもはやどうでもよいことになった。それは一場の芝居のごときものだ。捕えられて敵の牢屋に連れて行かれることも、いまはリアにとって何のこともでない。コーディーリアとともにいることは、不変の真理とともにいることは、彼にとっては最大の慰安であり、最大の安心である。

Come, let's away to prison:

We two alone will sing like birds i' the cage:

When thou dost ask me blessing, I'll kneel down,

And ask of thee forgiveness: so we'll live,

And pray, and sing, and tell old tales, and laugh

At gilded butterflies, and hear poor rogues

Talk of court news; and we'll talk with them too,

Who loses and who wins; who's in, who's out;

And take upon's the mystery of things,

As if we were God's spies: and we'll wear out,

In a wall'd prison, packs and sects of great ones,

That ebb and flow by the moon. — V. iii. 8.

（さあ、牢屋へ行こう。二人だけで籠の中の小鳥のように歌おう。そなたがわしに祝福を求める時、わしはひざまづいてそなたに許しを求めよう。そのようにして日を送り、お祈りをしたり、歌を歌ったり、昔ばなしをしたり、金びかの蝶を笑ったり、あわれな奴らが宮廷のうわさをするのを聞いたりしよう。その連中と話もして、誰が負けて誰が勝つの、誰が榮えて誰が衰えるのなどと語り合い、神様の密偵でもあるかのように、万事の成行の秘密がわかっていようなこともしよう。そうして、四方が壁の牢屋の中で長生きをして、月の力で満干するえら物どもの離合集散の行く末を眺めてやろう。）

しかし、戯曲『リア王』は、ここで終わってはいない。シェイクスピアは、この後に、大きな逆転を持って来ているのである。すなわち、リアは、コーディリアが悪の力によって滅ぼされるのを目撃しなければならないのである。暗夜にただ一つ燃えつづけていた光が、悪に扼殺され、世界はふたたび暗黒に覆われるのを、リアはその眼で見なければならなかった。リアはたしかに悪がみずからの力で滅んで行くのを見た。しかし彼は同時に、コーディリアもまたかれらの手によって滅ぼされるのを見なければならなかった。エドマンドが、死際に、「自分の本性に反して、いささかの善を行いたい」(Some good I mean to do/Despite of mine own nature — V. iii. 243.)と言って出した、コーディリア殺害命令の取消しは間に合わず、オールバニー（とわれわれ）が、彼女の生命の安全を切実な気

持で祈るそのところへ、リアの腕に抱えられて、すでに息絶えたコーディーリアが運ばれて来るのである。

And my poor fool is hang'd ! No, no, no life !

Why should a dog, a horse, a rat, have life,

And thou no breath at all ? Thou'lt come no more,

Never, never, never, never ! —— V. iii. 305.

(ばかな奴だ、締め殺されてしまった！ もう、もう、もう生命がない！ どうして、大や馬やねずみには生命があって、おまえには少しの息もないのだ。おまえはもう帰って来ない、もう、もう、もう、もう、もう決してだ！)

こうして、オールバーニによって王の全権がリアに返還されたのも束の間、忍苦には強いリアの生命もついに切れたのである。

リアは、

Do you see this ? Look on her, look, her lips,

Look there, look there ! —— V. iii. 310.

(あれが見えるか？ あれを見ろ、見ろ、あれの唇を、あれを、あれを！)

と叫びながら息絶える。ブラッドリーは、リアのこの叫びを、コーディーリアの口が動いたと、すなわち彼女が生きていると錯覚して、リアが発した歓喜の叫びであり、リアは「耐えがたき歓喜」(unbearable joy)のうちに悶絶したと解釈している。そして、リアが欺かれたと知ることには、われわれに最高の苦痛を与えるかも知れないがそうで

ある、と言っている。しかし、ブラッドリーのこの解釈は、あまりにも人情的にすぎるように思われる。そしてこの戯曲の悲劇性を強めるよりはむしろ弱めるものであると思われる。ブラッドリーの解釈は、最後に於てリアを救いたいというブラッドリーの願望に由来するとしか考えられないが、もしそうだとすれば、その願望は余計なものであった。すでに述べたように、リアはコーデリーリアの眞実を通して人間性の存在を確認し得た時、すでに救われているのである。リアの悶絶の叫びは、「やわらかい、やさしい、低い声」(cf. V. iii. 272)を発していたコーデリーリアの口が、いまやその声を絶って、文字どおり死の沈黙に陥った実感のはげしさが、リアに叫ばせた悲痛の叫びであった。それはリアの世界をまっ暗にするものである。しかし、シェイクスピアがこの戯曲で描こうとしたものは、元来暗黒の世界なのである。いや、暗黒に閉された世界の真中に、ただ一粒の光を見出しているのがこの戯曲である。暗黒に塗りはじめられたキャンパスは、暗黒に塗り終えられた。しかしそのキャンパスの上には、画家の筆がおかれる寸前まで輝いていた一点があった。その一点の残像がわれわれの脳裡に残っているかぎり、われわれはこの戯曲を完全に暗黒とは言いい切らないであろうし、その光の一点が存在したことをもっとも強く断言できる者がリアであったことを疑わないであろう。キリストの存在がこの世を救っているように、リアの世界はコーデリーリアの存在によって救われているのである。

本稿は、すでに諸所に発表した「ハムレットの悲劇」、「ハムレットの理想主義」、「ユリシイズの現実主義」、「エドマンドの自然観」、「マクベス試論」その他とともに、シェイクスピアの悲劇に関する筆者の論考の一部をなすものである。